

しのみや



杉並区立四宮小学校

令和5年6月30日

一大人の物差し

副校长 齊藤 慎一

早いもので1学期も残り一ヶ月になりました。子どもたちが楽しみにしている夏休みまであと少しです。その前に1学期に学んだことをしっかりと定着する時間を確保したいと思っています。

さて、我々大人はどのように子どもを見ているでしょうか。ともすると「子どもとはこうあるべきだ」という大人の物差しで子どもを見てしまっているのでしょうか。

例えば、ある子は通常のテストで60点くらい取れる力があるとします。ある日、その子が80点を取りました。皆さんはこのとき、どのような声をかけるでしょうか。「頑張ったね。すごいね。」と認め、褒める言葉をかけるでしょうか。それとも「100点まであと20点もあるじゃないか。努力が足りないんだよ。」と足りないところを指摘する言葉をかけるでしょうか。もちろん、どちらが正解という話ではありません。ただ、前者の場合はもともとの60点というその子の立ち位置を基準として、そこからの成長に目を向けています。60点から80点に上がったのですからプラス20点という見方になります。一方、後者は100点という大人の基準から見ています。100点から80点なのでマイナス20点という見方になります。つまり、同じ事象であってもどこに目を向けるかによって見え方や捉え方に違いが生まれてくるのです。

「子どもとはこうあるべきだ」という大人の基

準、物差しで子どもを見ると、どうしてないものねだりになります。「うちの子はあれもできない。これもできていない。」「他の子と比べて、どこか違っているのではないか。」と不満や不安を抱くことになります。そうではなく、その子の世界観に立って物事を見てみると、そこにはその子なりの豊かな学び、成長があることに気付きます。このような見方になると「うちの子は、こんなに素敵な考え方をもっているんだな。」「他人と比べずに、この子の良いところを見てあげよう。」という見え方になります。

大人の基準で見ようとする心理は、その子の将来を考え、良かれと思って生まれるものです。しかし、子どもは未来のために今を生きているではありません。小学生という「今」を生きています。だからこそ、我々大人はその子の気持ちや考えていることに価値判断をせず、共感的に見ることがとても重要だと思うのです。その子のありのままを受け止めると言ってもよいでしょう。自分の価値観を大切にしてくれると感じた子は自分に自信をもつようになります。そして、安心して様々なことに挑戦しようとします。慌てずにその子なりのペースで成長してもらいたいです。

一人ひとりが輝く原石をもっています。学校はその子の原石を見つけ出すとともに、その子の「今」に共感できる存在でありたいと考えています。

専科の窓

中学年の算数を担当しています。先日、副校长先生から「ラーニングピラミッド」について教えていただきました。「誰かの話を聞く」場合の学習の定着率はわずか5%、一番定着率が良いのは「ほかの人に教える」で90%なのだそうです。子どもたちが意欲をもち「算数が楽しい」と思えるように、子どもたちの姿から学び、授業の工夫に努めます。
(少人数算数担当 長沼昌子)

今年度1、2、3年生の音楽を担当しています。音楽は自分を表現する手段の一つだと考えています。子供たちにはまずは楽しんで、そして自分の思いを音楽に乗せて生き生きと表現できるようになってほしいと願っています。音楽の授業を通してそのような力を育んでいけるよう努めて参ります。どうぞよろしくお願いします。

(低学年音楽担当 奥村優美)